

共生日本語教育実習における 実習生間の言語的共生化過程の研究

平野 美恵子

学位取得年月：平成 23 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】 持続可能な教員養成、日本語母語話者・非母語話者教師、協働、 既有能力の発揮
【要旨】

言語生態学に基づくと、多文化社会を構成する人々を牽引しようとする日本語教師が、共生社会の実現への意思を持ってともに共生の理念を実践化する過程は、共生への道の根幹をなし、人々の生き方の保全・展開をもたらす。そこで本論文は、共生社会の実現を目指す日本語教師による言語的共生化過程の記述を行うことを研究目的とした。実習生がテーマ設定・参加者募集・教室活動検討など全ての事柄を主体的に担う共生日本語教育実習を対象とし、日本語母語話者・非母語話者実習生間で教壇実習前に持たれた3カ月間の協働的話し合いを分析した。

研究1では、言語的共生化の前提であり、「自分は何者か」を示す《自己保存》としての情報提供を分析した。日本語教育歴や母語によって情報提供者が固定化される従来の日本語教育実習とは異なり、母語や日本語教育歴などに関わらず、実習生の多様な背景を活かした情報提供が行われていた。話し合いに貢献したいという姿勢がぶつかり合う競争のような緊張感がある中、次第に実習生間に互恵性が形成されていき、自己と他者の既有能力が有機的に結合され、協働知が生みだされていた可能性が示された。

研究2では、各実習生の様々な視座がぶつかり合い、それらが内在的に統合される言語的共生化のために不可欠な《異なりの対立》を分析した。《異なりの対立》としての反対意見表明を、日本語母語話者・非母語話者実習生ともに、当初自身の母語でのやり方に基づいて述べていたが、次第にやや明示的な形式に収束し、その過程で反対意見表明が受け止められるようになり、《異なりの内在的統合》が形成されていた。こうした言語の形式と内容の変化を共起させるのは「共生日本語」の創造であり、共生社会を実現したいという実習生の意思が、反対意見表明とその受け止め方に変化をもたらしたことが示唆された。

研究3では、言語的共生化が起こる《異なりの内在的統合》に至る過程として、参加者と教室活動をめぐる話し合いの展開パターンとその変化に着目し、実習生の参加者や教室活動に対する考え方がどのように統合されたかを縦断的に観察した。展開パターンとして、様々な意見が提示される「ブレインストーム的展開」、情報提供者・受容者間の一方向的な発話連鎖が起こる「伝導的展開」を経て、ある発言が反論によって吟味され、協働的結論生成をなす「発展的展開」が確認されたが、その過程は螺旋的かつ漸進的であった。この過程の中で、共生という理想と現実との乖離に葛藤を感じながら、参加者や教室活動への見方を実習生が交差・拡大させ、共生の理念を実践化しようと試行錯誤する様子が窺えた。

研究4では、《異なりの内在的統合》が起こらない場面を、実習生であった筆者が内省・分析し、言語的共生化過程の課題を提示した。分析の結果、日本語母語話者実習生が非母語話者参加者の抱える問題を優先する、あるいは自身が参入側としての経験に基づいた発言をした時、非母語話者実習生の参入側としての経験に基づいた発言が阻まれ、彼らの参入側としての《自己保存》が阻害されていた可能性が示唆された。《異なりの内在的統合》が観察された研究1～3の議論では、どのように活動をデザインするかなど話題が対象化されたものであった一方、研究4の議論では、多文化社会を生きる当事者としての立場が強調されており、日本語母語話者・非母語話者実習生が多文化社会の「私とあなた」として対峙することは容易でないことが示唆された。日本語非母語話者実習生による既有能力の発揮と彼らの豊饒なリソースを通じた母語話者実習生の学びを促し、実習生双方の言語と生き方を保全していくために、日本語非母語話者実習生の参入側としての《自己保存》が十分なされるよう配慮することが、課題として浮かび上がった。

共生日本語教育教員養成への示唆としては、理念と実践の往還を促す持続的な内省、日本語母語話者・非母語話者教師による多文化社会を生きる当事者としての対話などを組み入れることが挙げられる。

(ひらの みえこ)